

いに村の飢饉・疫病払いや、豊作と健康を祈願して作られたものではないかと思われます。作られた当時どれくらい数の仏像があったのかも定かではありません。しかし今現在、約一二〇体の仏像が確認されています。明治時代に洞窟の前壁が長年の風雨にさらされていた為に崩壊して多数の仏像が前の池に埋没しました。またその岩盤の崩壊は付近の数軒の宿屋の中まで泥を押し上げる被害を与えたといえます。その後、土の中に埋まった仏像を掘り起こして元の位置に戻したりはしましたが今現在残されている仏像も保存状態が良くなく早急な保存対策が必要だと考えられています。

わが家に通った ある特攻隊員の思い出

非会員（鶴高四回生・甲子園大会出場）

佐藤 雅彦

昭和一九年（一九四四）の夏と云えば、サイパン玉砕後の戦局急を告げる時期であった。当時、私は別府市立北国民学

校（現トキワ百貨店の場所）の五年生であったが、丁度夏休みの最中であつたと記憶している。

流川通り四丁目の日用商会の武田さんと両親が昵懇であつた関係で、武田さんからの紹介があり、海軍将校二人が週末の休暇を利用して、別府に入湯旁々骨休めに来たいので部屋を提供できないかとの話であつた。

わが家は流川通り二丁目（港町二組）にあり、両親と姉二人（長女は昭和一八年に陸軍中尉と結婚）そして私の五人家族、一階に三部屋、二階四部屋、地階に内湯がある間取りで余裕もあつたこと、一つは父の四人の兄たちが陸軍軍人であつたことなど、母の世話好きな性格もあつて結局引き受けることになつたのである。

二人の最初の印象は、若々しく、凛々しい海軍の真っ白な夏服姿が良く似合う将校（少尉）さんであつた。二人とも東京都出身の慶応義塾大学工学部の学生で、二年生の時（昭和一八年秋と思う）学徒動員となり、翌年柳ヶ浦航空隊（宇佐）に配属され、連日、飛行訓練に従事しているとのことであつた。一人は貴島さん、厳父が製紙会社の役員、弟二人も慶応の学生という家庭、一人は高橋さん、東京銀座の洋服屋の一人息子、二人して実に育ちの良いスマートな好青年であつた。

当初はお互いに遠慮もあつてか、両親も姉たちも氣遣つて余り差し出がましく口を出さない雰囲気であつた。また彼らは彼らで温泉につかつて浴衣姿になり、ある時は紙上に線を書いて将棋を指したり、寝転がったり、ある時はピアノを弾いたり、歌を唄ったりして寛いでいた。

食事時になると、その都度軍服に着替え、海軍指定食堂へ食事に出かけるという日課であつた(当時流川通り一丁目の長崎屋旅館の別館上隣に千疋屋というレストランが指定食堂だつたと記憶している)。当時食糧事情も日々逼迫していた時期で、わが家も主食は底をつき、代用食ばかりであつたが、折角寛いでいるのに、食事時になると、その都度軍服に着替えて外出する彼らの姿を見かねて、母が「何もないがご一緒にどうですか」とお誘いすることになり、二人共「是非そう願いたい。実はわれわれも最初からそれを望んでいた。食べる物は自分たちが運んできませんよ」ということになる。

一般家庭では全く手に入らない物が、まだその当時軍にあつたのである。というより特攻訓練に終始する彼らだけには支給したのである。いわゆる通勤カバンに一人が酒二本、一人は缶詰類を、と云つた具合に持ち帰り、土曜日の夜は毎回酒宴となつた。

私共の対応も徐々に家族ぐるみとなり、彼らが来るのが待ち遠しいほどになってきた。彼らも最初は、玄関の戸を開けて「お邪魔します」と帰ってきたのに、それが「只今」に変わり、遂に「親父戻つたぞ」にまでセリフが変わつてきたのである。

東京生まれの東京育ち、そして恵まれた家庭環境にあつた二〇歳そこそこの若い彼らにとって、青春を謳歌したい学生生活の真っ只中、突如として戦争の悲劇の中に巻き込まれ、しかも国のため命を投げ出さねばならなかつた当時の社会情勢とは云え、彼らの胸中を察するとき、決して口には出さなかつたが、東京の家族と離れ、九州の片田舎の柳ヶ浦での訓練に終始する毎日は、耐え難いものであつたと思われる。

ささやかな酒宴で、その憂さを払拭するために若さに委せて馬鹿騒ぎする彼らを見て、私の幼心も切ない思いに駆られるのであつた。(中略) 子煩悩であつた父、酒好きであつた父が、彼らと一緒に騒いだのも理解できる。それは三人娘に一人息子の家庭に息子が二人増えたからであり、彼らの父親がわりをしたからである。肩を組み合い大声で一緒によく歌も歌っていた。(中略) またピアノを弾きながら慶応の応援歌「若き血に燃える者」もよく歌っていた。そして

私に対し「坊やい、学校だよ」と口癖のように言っていた。恐らく楽しく希望に満ちた良き学生生活のことを思い出していたのであろう。私にとって、これらの事柄は幼心に深く浸透し、生涯忘れ得ないものとなった。

こうした中、戦況はますます悪化の一途をたどり、昭一九年秋から米軍はフィリピン Leyte 島に上陸、翌年一月にはマニラを奪回、四月一日には愈々沖縄上陸作戦を敢行することになる。昭和二〇年の正月はどのように彼らと過ごしたか記憶に乏しいが、その年から彼らが帰ってくる日が激減したように思う。それもうなずける戦況下であったことは確かである。

この年から米軍による本土爆撃が本格化し、大分県下においても、三月から連日のように B 二九による爆撃が相次ぎ、家の小さな庭に防空壕を作り、空襲警報が出るたびに避難したのである。更に激しくなる空襲に対処して子供連中だけ餅ヶ浜海水浴場の海の家に疎開したが、この時大分の街が火の海になったのを海辺で目撃したことをはっきり覚えてい

る。この時期には彼らとは殆ど音信不通であったが、四月中旬であったろうか、突然写真に撮った彼らの遺書が届いたのである。それには「僅かな期間であったが、第二の故郷となっ

た別府の両親を始め家族の皆さん方にはほんとに世話になった。われわれは日本本土を死守するため沖縄へ特攻として出陣し、国のため命を捧げる、別府の上空を迂回しお礼を申し上げお別れを告げました。今から出撃します。ほんとにありがとうございます」という内容であった。そして日付は四月七日となっていた。何故、あんなに素晴らしい若者達が何故：断腸の思いで涙が流れるのを禁じ得なかったのである。

私事で恐縮ではあるが、戦後私は別府中学へ進み、別府鶴見丘高校から慶応義塾大学へ進学することになった。高校時代野球に現をぬかし、(昭和二五年夏、甲子園出場の夢叶う) 学業を疎かにしたため三田の門をくぐるのに二年もかかった。他の大学に目もくれず、初志貫徹だったが、今思えば慶応ボーイ二人の影響、導きみたいなのが存在していたように思う。彼らが途中中座せざるを得なかった代わりに私が意を受け継ぎ、いささかなりとも恩返しができたかなと思えてならない。人生の中で束の間の彼らとの出会いであったが、余りに強烈で生涯忘れることはできない。仕事も第一線を退いたので、是非一度柳ヶ浦や鹿屋に出かけてみたいと思っている。

平成八年十一月